

# 『朱漆楼閣人物箔絵菊花形食籠』 修理報告

佐久本純<sup>1</sup> 土井菜々子<sup>2</sup>

## I. はじめに

本資料は、一般財団法人沖縄美ら島財団所蔵の『朱漆楼閣人物箔絵菊花形食籠』である。

令和4年5月9日より令和5年3月28日まで沖縄県立博物館・美術館修理修復室内の琉球漆工藝舎にて修復が行われた。修復にあたっては、佐久本純を担当職員とし、土井菜々子を修復責任者兼担当者とした。

## II. 修理報告

### 1. 名称

朱漆楼閣人物箔絵菊花形食籠 (No. 197)



### 2. 員数・法量(mm)

一合 高さ 226 径 258

### 3. 資料概要

六十四弁の菊花形、印籠蓋造りの食籠。全体的に丸みのある形状。身と同形で、やや高さを持たせた裾広がり的高台が付く。外側は朱漆塗に箔絵を施し、内側と高台裏は黒漆塗。蓋表には楼閣人物図を表す。側面凸部には、波形回文と花文様が高台まで描かれる。

<sup>1</sup> 一般財団法人 沖縄美ら島財団 総合研究センター 琉球文化財研究室 琉球文化財研究係 主事

<sup>2</sup> 琉球漆工藝舎 代表

#### 4. 損傷状態

資料全体に汚れが付着し、僅かに黒味を帯びている。蓋表には、複数の木地亀裂が入り、内側にまで達する亀裂も見られる(図 1-1, 1-2)。また、火災によって貼りついた薄葉紙の付着跡や茶色い汚れが見られる(図 2-1, 2-2)。



図 1-1 甲の亀裂

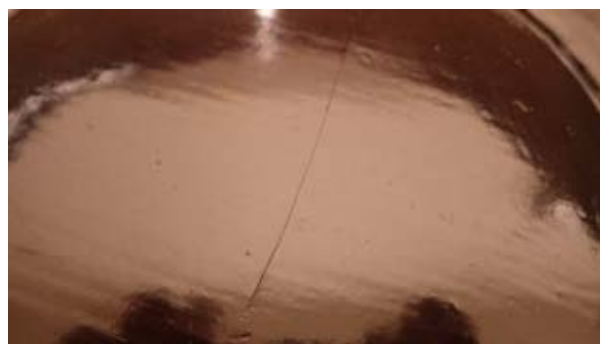


図 1-2 蓋甲内側の亀裂

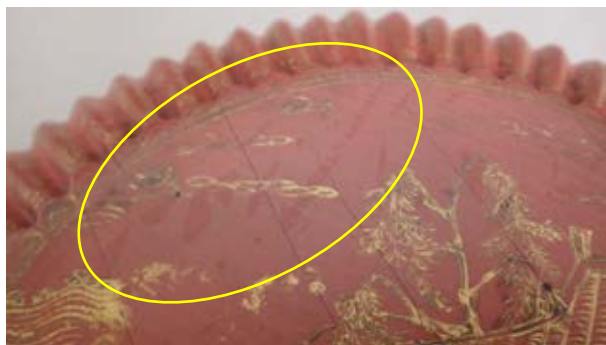


図 2-1 薄葉紙の付着跡



図 2-2 汚れ

合口から側面にかけて木地亀裂が入り、塗膜が浮き上がる(図 3)。



図 3 木地亀裂

側面には、火災被害により滲出したと思われる茶色い汚れが数箇所につく(図4)。また、側面の凸部、口縁、立上りなどに塗膜欠損が多数見られ、下地、布着せ、木地など、それぞれの層が露出する(図5-1, 5-2, 5-3)。口縁部や見込みには、数箇所亀裂が生じる(図6-1, 6-2)。



図4 汚れ



図5-1 凸面欠損部



図5-2 立上り欠損部



図5-3 立上り欠損部



図6-1 見込み亀裂



図6-2 見込み亀裂

高台には、数箇所、塗膜欠損があり、下地および布着せが露出している(図6-3)。また、豊付きは、擦れにより広範囲に同様の損傷がみられる(図7-1, 7-2)。底裏面には、僅かに亀裂が生じている(図8)。



図 6-3 高台欠損部

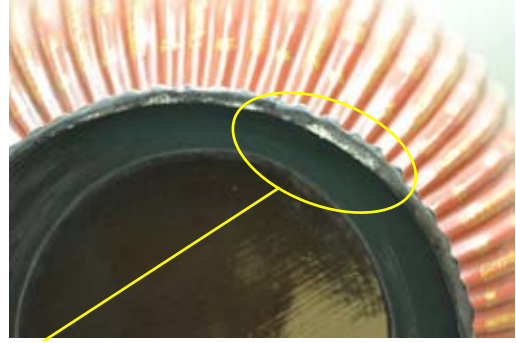


図 7-1 高台欠損部



図 7-2 畳付き 欠損部



図 8 底裏の亀裂

## 5. 修理原則

現在、我が国で行われている指定文化財漆工芸品の保存修理に則り、現状保存修理を原則として行う事とする。修理に際しては、十分に事前調査を行い、傷み等の現状を確認した上で修理工程を決定する。また、写真撮影を伴った修理の記録を取り、修理後と比較できるようにし、修理終了後報告書を作成し提出する。

## 6. 修理方針

火災によって付着した薄葉紙の繊維やシミの除去が必要である。塗膜の劣化に対しては、漆固めによる強化を行い、火災前の状態に近づける。

## 7. 修理工程

- ①修理前写真撮影、調査
- ②クリーニング
- ③漆固め
- ④麦漆含浸
- ⑤刻苧充填
- ⑥摺漆
- ⑦下地付け
- ⑧修理後写真撮影
- ⑨報告書作成



## 8. 修理内容

はじめに修理後との比較ができるよう、修理前撮影および現状調査を行った。クリーニングは、資料全体の埃を払った後、精製水で湿らせた綿布を用いて拭き上げた。側面や天板に付くシミや付着物の除去は、精製水やエタノール水溶液(60~70W/V%)では、あまり効果が見られないため、重曹水(3~5W/V%)を使用した(図 8-1~8-4)。重曹水によるクリーニングの際は、汚れと混合してできた塩を残留させないように、精製水を染み込ませた綿布で拭き取った。



図 8-1 付着物の除去



図 8-2 シミの除去



図 8-3 シミの除去前



図 8-4 シミの除去後

塗膜の艶を取り戻すために漆固めを行なった。溶剤<sup>3</sup>で希釈した生漆を塗布し、表面に漆が残らないよう拭き取った(図 9-1, 9-2)。



図 9-1 生漆の塗布



図 9-2 拭き取り

<sup>3</sup> ターペンタイン/ホルベイン社

次に木地や下地が露出する部分や、亀裂の箇所を溶剤で希釈した麦漆を含浸させて補強した(図 10-1)。

塗膜欠損部には、欠損部の状態に合わせて数回に分けて刻苧を充填した。(図 11-1, 11-2)。



図 10-1 麦漆の含浸



図 11-1 刻苧充填



図 11-2 刻苧充填

刻苧を充填した箇所は、面を整えるため下地を付け、研いで滑らかに整えた。下地の表面は生漆を摺って仕上げた(図 12-1, 12-2)。



図 12-1 下地付け



図 12-2 下地研ぎ

朱漆塗膜の艶を取り戻すために摺漆を施した。色味の変化を避けるため、調合した透漆(木地呂、梨子地、生上味)を溶剤で希釈し、塗膜に塗布した後、表面に余分な漆が残らないよう拭き取った(図 13-1, 13-2)。さらに、蓋表は他の箇所より塗膜劣化が進んでいるため、摺漆を複数回行なって艶を合わせた。最後に、修理前と比較出来るよう修理後の撮影を行った。



図 13-1 透漆の塗布

図 13-2 拭取り

## 9. 修理場所

沖縄県立博物館・美術館内修理修復室

## 10. 修理期間

令和4年5月9日～令和5年3月28日

## 11. 所見

- ・立上りおよび高台に比較的目の粗い麻布による布着せが確認できる。
- ・身の立上り部分は、曲輪をはめ込んだ構造となっている。



修理前修理後写真



全景 修理前



全景 修理後



蓋甲 修理前



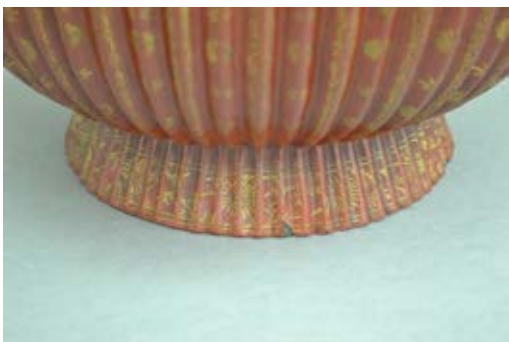
蓋甲 修理後



身 立上り 修理前



身 立上り 修理後



高台 修理前



高台 修理後